

第4回研究大会課題研究シンポジウム「奉仕体験・体験活動」の原理を問う：生活体験学習学の構築をめざして

<https://doi.org/10.15017/9056>

出版情報：生活体験学習研究. 4, pp.125-147, 2004-01-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

第4回研究大会
課題研究シンポジウム

「奉仕体験・体験活動」の原理を問う
——生活体験学習学の構築をめざして——

日 時：2003年3月1日(土) 14:10～16:30

場 所：福岡社会教育総合センター

コーディネーター：南 里 悦 史 (九州大学)

シンポジスト：辻 浩 (日本社会事業大学)

正 平 辰 男 (庄内町生活体験学校・社会教育総合センター)

上 野 景 三 (佐賀大学)

進 藤 昭 典 (厳木高等学校)

課題研究シンポジウム 「奉仕活動・体験活動」の原理を問う

——生活体験学習学の構築をめざして——

日時：2003年3月1日（土曜日）

午後2時10分～4時30分

コーディネーター：南里悦史（九州大学）

シンポジスト：上野景三（佐賀大学）

正平辰男（庄内町生活体験学校・

社会教育総合センター）

辻浩（日本社会事業大学）

進藤昭典（厳木高等学校）

南里

これからシンポジウムを始めたいと思います。今回のテーマは「奉仕体験・生活体験の原理を問う」ということで、4人の方に登壇をいただいております。生活体験学習の基本的理論の枠組みをどのように捉えていくのかということ、これまでの学会の蓄積であった生活体験学習の実践を踏まえての理論提起と、もう一つは、奉仕活動・ボランティア活動を生活体験学習としてどのように捉えていくのかということ、二人の方を迎えております。そこで、奉仕活動を踏まえたシンポジウムの柱立てと流れについてコーディネーターとして最初にふれておきたいと思います。

7月29日に教育改革の答申というのが教育審議会から出ておりますが、奉仕活動が生活体験の内容と、その必要性といったものにだんだんと迫ってきたという形を示しているのではないかと思います。一言で言えば、国民教育の課題の内容を新しく示すという積極施策となって、教育現場や家庭教育に大きな戸惑いをつくり出している内容が提示されてきたと言えましょう。

この学会のシンポジウムでは、物質的豊かさのたくさんひずみが子どもの発達の大きな障害となり、様々な教育問題を引き出し、その再生の核心が「心の教育」であるとする教育理念として提出されたことに、逆に教育論議の混迷の深さを表しているとともに、教育ビジョンの理論の浅さを先ず認識しなくてはならないと考えております。

今、子どもの生活体験学習は全国的に、必要性の段階から、各地域の実践においては地域の性格・環境にあったような生活体験学習の内容が必要なのか工夫されている段階となってきました。そのことは、生活体験学習の実践が子どもの生活技量や感性においてネガティブな現状を議論の対象とするところから、人間としての基本的能力や関係性や興味・関心をつくり出す実践的な探求が求められていることにも示されています。それは、子どもの置かれている豊かな生活環境のネガティブな内容や課題に対する理解だけでは、地域環境の子どもの発達・地域文化・地域特性と、子どもや大人の関係、乃至は子どもの存在感等々、人々の人間としての尊厳の根源さえも失いかねません。「豊かさ」のひずみは子どもや大人に国民共通の目標として方向付けられた選択的価値を受容しなければならぬ危機意識が知らないうちに形成されてくると同時に、生活体験学習に参加し、少しずつ変わってくることによって、子ども一人一人が多様であるという認識や子どもの技量の大小、行動や感性の違いを補い合う力をつけることとなり、一人では生きられない、自分の意のままには動かせない、人間としての発達や本性を、他の人によって犯すことができない基本が存在することに認識が広がっていくのです。一言で言いますと、国民を一つの方向で価値付ける教育内容が出されていることに対して、学習を通して危機意識を持たなければならない。それによって、人間の尊厳、基本的能力、学習の基本というものをどのように考えていくのかというところで、体験学習実践の方向性が向き始めているということで、私たちの学会もその方向にまさに向き合っているところです。

元々子どもにとって、人間としての普段の日常生活は地域の共同性を基盤にしています。しかし、日常生活といえども、決して同一性の枠組みではない。生活環境の中での体験や体験学習は家庭生活、地域環境、文化環境、自然・社会環境、多くの動植物の中で、子どもがそれぞれの変化、特性、違いの認識の枠組みを無意図的に受容し、その中で個々の人間の能動的な働きかけと刺激によって、興味・関心を持ち、生活の中の体験として形成され、集団の中での関係性や認知による文化や技量を持って成立します。また、これはさらに奉仕活動に関することにつながってまいりますが、

特に自然・産業、生産の生業においては、年代別の順序性、共同性、協調性と共に秩序、倫理、忌避が蓄積され、生産労働生活の節目としての役割や手順の体得の過程と不可分のものでしょう。子どもと大人の間では各々の役割があり、イニシエーションがあり、まさに人間の存在と尊厳と役割は多様性の中での生活・文化の共同性を基盤にしてきました。本来、奉仕活動はその中で、役割と関係のどのような位置づけの中から、協働・援助し合っていくのかを主体的に捉え、人の役に立つことによって、存在を認識することと考えております。社会が同一性の規範性を強制したときに、歴史的には多様な存在と文化が否定され、画一的価値と競争と差別が作り上げられてきました。子どもの生活体験は、人間関係づくりが基本にあり、日常生活環境や動・植物の飼育、栽培、ものづくりの中での技術・技量の差も、本来平等に保持しているわけではないゆえに、生活の有用性として共同で援助しあい、助け合い、その役割や存在が生きる意味を徐々に深めてきたと言えるでしょう。したがって、子どもにとって、また大人にとっても、生活の価値や行動が全く同じであるはずもなく、子ども社会、大人社会の役割の固定化もない。生産から消費、生活の利便性による社会の機能分化が生活・文化の共同の営みを崩し、役割の固定化、そして画一性と逸脱への対応マニュアルを作り出し、共通の目標やレベルとしての体験や知識の構図を描いてきたために、生活体験という形と方法にこだわった学習という「体験＝発達」が特化されてきたのです。そういう特化された体験学習では駄目なわけです。

本学会の設立の意図と生活体験学習の内容は、到達すべき内容や欠損を補完する生活体験学習ではなく、全国に地域性や生活・文化環境の違い、子どもの一人一人の特徴が異なるように、生活体験学習を支援する大人も一人一人が違うという中で、様々な生活体験学校が生まれてくることを意図しています。あるべき生活体験学習を固定化しないで、実際の地域環境・文化環境、子ども・大人集団の中から生まれた生活体験学習の活動の意味を捉えることを通して、子どもの教育の大きな、更に広い、多様な内容を見直していただく必要でしょう。

これが今日、私なりの視点でございりますが、生活体

験学習そのものとは子どもの教育の原理ではないはずであり、ここでも生活体験学習は子どもの教育の生活基盤としての基礎的原理的枠組みと言えるものと思います。それには、子どもの生活・情報・文化の中での無意図的な感覚から興味・関心や技量の発達につながり、個々の多様な存在や尊厳と役割の社会的有用性や関係性を感得する生活体験学習の広がりを各関連分野から、その基本的実践の原理や概念、多面的な内容・方法について検討することが重要だと思われます。

シンポジウムの視点として(1)から(5)について示しております。

- (1) 形成と認識と学習の違いと体験学習—存在と認知と能動的働きかけ
- (2) 子どもの集団の中での共同を基盤にした活動と協働の関係性—基礎的体験と多様性
- (3) 大人の学習が子どもの体験をつくる課題性の認識と大人と子どもの葛藤
- (4) 子どもの自立を促す大人の支援、役割、限界と意味ある他者の存在
- (5) 年齢別、ライフステージ別の体験の基本と発達段階やカリキュラムの視点

この5つの視点については、それぞれに色々な考えがあるかと思います。たとえば、1番目には発達の中における形成概念や認識や学習というのは、やっぱり違うという問題とか。2番目には基礎的体験と、体験の受容、多様性を持った体験というのは、子ども集団の中での共同を基盤とした協働と関係しているとか。それから3番目には、大人の学習が子どもの体験をつくる課題性の認識であり、それには、大人と子どもの葛藤が重要であるとか。4番目には、子どもの自立を促す大人の支援、役割、さらには大人の限界、もう一方では、大人にとっても子どもにとっても意味ある他者の存在というのは何なのか。そして5番目には、年齢別、ライフステージ別の体験の基本と発達段階やカリキュラムの視点とか。これらは、総合的・日常的に枠組みというものはありませんが、こういったことが議論できればと思います。

これに共通して議論するというのではなくて、今回、シンポジストの方々それぞれに奉仕活動・生活体験の基本的な原理ということをお願いしております。私とそれから4人の方が並んでいただいておりますが、

それぞれ意見が違って当然だろうと思いますし、どこが違うのか、それから、それを最後にどうしていったらいいんだろうか、どういう実践の視点を持っていたらいいのか、時間の限り議論出来たらと思います。

では最初に、この研究担当の理事として、この問題を提起されました上野会員の方から、もう少し具体的にかつ中身の方に触れていただきたいと思います。

上野

この学会の研究担当をやっております。今回のシンポジウムでは、生活体験学習の構築を目指すという副題をつけておりますが、皆さんのお手元には、要旨集の中に入っておりますものと、それから後で今日の午前中の分科会でご報告をさせていただきました「体験学習の実践と理論の統合に向けて」という資料をお配りしているかと思っております。この二つを使いながら私なりの問題提起をさせていただきたいと思っております。では、まずレジュメの方をご覧ください。何故、このテーマを設定したのかというと、この学会は、創立されてまだ4年に満たない若い学会です。したがって基本的な概念の確定や研究の対象領域の設定ということはまだ不十分な段階であり、全体的にまだ未開拓な研究分野であると言えるかと思っております。しかし、他方では実践的に子どもの体験不足というものが指摘され、その必要性から生活体験学習に向けての様々な取り組みが展開され、拡大の方向にあります。この実践的な分野というのは、現在の子どもの実態への警鐘という観点から、実践が展開されていく傾向にあり、先駆的な福岡県庄内町の生活体験学校に導かれながら全国的にその取り組みが拡大していく中で、研究活動が整備されてきたと言えるのではないかと思います。

しかし、これからの研究と実践の発展を展望しようとするときに、改めて、次の点を課題として据えなければなりません。既存の教育学理論と生活体験学習の実践とに導かれながら、これまで積み重ねられてきた蓄積の中から、今日の子どもの生活に求められる教育的価値を論理内在的に導き出すということではないかと思っております。そのためには、基本的な概念についての検討を行い、生活体験学習の理論的な構築が求められているのではないかと考えて今回のテーマを設定しました。

今回のテーマは、「生活体験、奉仕体験の原理を問う」

ということにしております。学会のテーマとしては、生活体験の理論の構築を目指してということでも構わなかったのですが、ご存知のとおり、この間の政策的な動向を見ますと、生活体験の義務化ということが掲げられ、そのことが教育現場に下ろされていくことによって、教育現場では多大な混乱の状況、また、総合的な学習の取り組みのなかで、「とにかく体験させればいいのではないか」という安易な体験主義などが生み出されているのではないかと考えられます。そこで、今回は、先ほど南里先生からお話がありましたけれども、何を原理とするかという問題があるかと思っております。その原理の構築に向けて私たちは進めていかなければならないのではないかと考えております。ここでは、私に課せられた課題というのは、この学会の総力を挙げてということになるかと思っておりますが、理論的な蓄積をレビューするということから始めなければならないのですが、シンポジウムの提起ということは、さし当たって理論的な構築に向けてのいくつかの観点を示すということで、私の役割を果たしていきたいと考えております。

まず最初に、子どもの生活体験の必要性と重要性というものがこの間、強く指摘され、取り組みも広がってきています。しかし、何故、子ども達に生活体験をさせるのかという点については、子どもの実態からの説明はなされていても、未だ説得的ではないように私には見えるわけです。というのも、子どもたちの「欠損」体験を補う観点では、ある状態から何か「欠損」しているという把握になり、それをどうやって補っていくのかという議論になりがちです。「欠損」そのものの持つ意味であるとか、何が「欠損」して、どの程度「欠損」しているのかという点については、議論が発展していません。また、先ほど南里先生からもご指摘がありましたが、「欠損」という捉え方だけでいいのかという問題があるかと思っております。この点につきましては、今日の午前中の分科会でも報告をいたしました。もう一つの資料としてお配りしたもののなかで、私は「欠損」というものを「収奪」と言い換え、そしてこの「収奪」と、日本のこの豊かさが持つ、豊かさの「過剰供給」、この両者をワンセットで実は捉えていかなければならないということ、午前中に提起しました。また、次に書いておりますように、コンビニに代表される利

便性の高い生活環境の中であって、不便な生活をさせていくということの意味は何かという点を問う観点というものが、実は弱いのではないかと考えています。つまり、日常生活の中ではしなくてもいい体験をなせさせていくのかということの意味を更に深めていかなければならないと考えております。今回は仮説的ではありますが、「生活体験学習とは、日常生活に埋め込まれた科学や生活の原理を体得していく学習を組織する営みである」と私なりに定義させていただきます。そして今日生活体験として、一般に理解されている、たとえば、体験させることに意義があると考えられる体験主義。また、ライフスキル論に代表されるような技術主義。また、それと関連して甘やかされた子どもたちを鍛えなおしていかなければならないといった鍛錬主義。また、色々な祭りに代表されるような伝統芸能を継承させていかなければならない、その中に教育的な価値があるんだという郷土主義的な価値論。これらの中の理論的な相違を検討することによって理論構築を深めていきたい。さらに、体験学習というものを私たちは、漠然として捉え、それぞれの論者によって自分なりのイメージや、枠組みで捉えているわけでありましてけれども、それに向けての合意を形成していくために、体験主義と言われたら体験主義でもない、技術主義と言われたら技術主義でもない、では伝統芸能主義かと言われたらそうでもない。では、そうではないものとの違いというものを明確にしていくことによって、この生活体験学習というものの持つ固有の教育的な価値というものを、探り出していきたいと考えたわけでありまして。

そこで、まず、体験主義との相違というものを考えていきたいと思っております。体験主義というものは、一般的には体験そのものに価値を見出し、そして、子どもの「欠損」してきた体験というものを補うと主張しようとするものだと思っております。ところが、先ほども申し上げましたように、「何故、しなくてもいいものをしなくてはならないのか」、「わざわざ体験させなければならぬのか」ということについての説明が不十分ではないのかと思っております。もう一枚、別にお配りしました資料の5ページのところを開けて下さい。この5ページの①のところ、生活の利便性、効率性によって、「生活習慣病」と言われるものが、今

日生み出されていることが分かります。この利便性の高い社会というものが子どもたちに何をもたらしたのかということ、準備しなくてもいい生活というものをもたらした。困ったときには、深夜でも開いているコンビニに駆け込めるような生活スタイルというものを生み出し、今日、余程の僻地でもない限り、コンビニエンスストアがないところはなく、またそのことが明日の準備を直前にしても、間に合うような生活スタイルを生み出してきたわけです。ここから準備をする習慣というものが無くなって、今の子どもたちは甘えていっているのではないかと、というような意識が形成されがちだと思っております。だから、奉仕体験を、あるいは生活体験をさせようといった話になりがちなのわけです。しかし、今日の高度に発達した資本主義社会の中でコンビニの利便性に代表されるような日常生活の中で、様々な体験をする機会というものは、ほとんど無いのではないのでしょうか。では、不便な環境におけばいいのかというと、そうでもない。でも何故、生活体験学習という形で体験学習をさせるのかというと、その説得的な説明というものは未だなされていないのではないかと、思っております。私は、自分の大学の講義の中で、学生たちにこういう質問をしてきました。「近年、子どもたちの能力というものは落ちてきている。マッチをつけてキャンプをしようと、そういう能力が落ちてきていると言われるんだけど、君たちは、マッチをつけることができるのか」という問いを投げかけてみました。学生たちは、「そんな馬鹿なことを聞かないでください。マッチくらい点けられますよ」と言う。では、「最近点けたのはいつなのか」と尋ねてみました。すると、学生達は、各々思いを巡らしていましたが、一人の学生が「そういえば、去年の8月くらいですかね」というわけです。では、「去年の8月くらいに何で点けたの?」と聞いてみたら、「蚊取り線香を点けた」と言うわけですね。これは、12月に聞いたことなんですけれども。では、他の学生に聞いてみますと、「いや、ここ数年点けた記憶が無い」と言います。「だって、自動点火もありますし、マッチで点けなければならぬ時にはチャッカマンを使えばいいではないですか」と言うわけです。ただ、一定年齢以上の方ですと、毎日マッチを点けなければならぬ方がおられるんですね。これは、家に仏壇があって、それをお参りされる方は

毎日マッチを点けられるわけなんです。

今の学生にとってみると、マッチを点けるという技術というものは、ほとんど不必要なんです。しかし、私たち、学校の教員やまた社会教育関係の職員というのは、「今の子どもたちは、マッチを点けることすらできないんだ」と嘆き悲しんだりするわけです。それと同じように、鉛筆を研ぐことさえできないではないか。また、ご飯を飯ごうで炊くことができないではないか。また、自分で包丁を使って料理をするということができないではないか、というような問題の取り上げ方をするわけです。ところが、この利便性にあふれた社会の中で、マッチを点けることすらない、鉛筆は鉛筆削りの方が上手なわけですから、そちらになびく。また、電気炊飯器で炊くことができる。料理だって、お惣菜を買ってくれば日常生活は間に合うわけです。しかしなぜ、その能力がないと言って先行する世代は嘆き、そのことを問題視するのか。そして、そのことをいくら、若い次の世代に問題だと言ったとしても、利便性の高い社会の中ではほとんど説得性を持っていないわけでは不会でしょうか。

そこで、マッチを点けるということはどういう意味があるんだろうかと学校の教師に尋ねてみました。学校の中でマッチを点けるということがあるのかということ聞いてみたのです。すると、こういう風に言われました。理科の先生でしたけれども、理科の実験のときに点けると言われました。理科の実験のときに点けるんだけど、実はさせたくないと言われるのです。「どうしてですか」とお尋ねしましたら、「危ないから」と言われるんです。「40人も生徒がいて、色んな子どもたちがいて、アルコールランプ一つを取り上げるのでも注意が必要だから。できれば、そういう時間を実験をさせるよりは、もっと授業を進めたい。だとすると、生徒実験をするよりは、教師実験で済ませた方が効率的だ」と考えるわけです。「ただ、教師が実験をするときも上手く行ったり失敗したりすることがあるので、授業を効率よく展開しようとする、教師実験もなるべく止めて、必ず成功しているビデオを見せた方が子どもたちには分かりやすいんだ」と言われました。そうやって、子ども達の学校生活の中からマッチを点けるということもなくなっていく。しかし、そこに困ったことがあると言われます。何ですかとお尋

ねしましたら、「マッチを点けるとき、自分の右手と左手で、マッチとマッチの箱を持ってこするという体験をしていないと、なぜ火が起きるのか原理は分からない。下手くそに擦り合わせたって、できはしない。つまり、何故火が起きるのかというメカニズムを理解させるためには、マッチを使うということが不可欠なんです」というご指摘を頂いたわけです。鉛筆を研げるということも、電動のシャープナーに任せておけばいいわけです。なのになぜ体験させるのかといえば削っていない鉛筆は、人間にとっては不要なものです。それをいかに有用なものに変えていくことができるのか。それは料理についても同じだろうと思います。ご飯が炊けるというのは、生の米がどういうプロセスで私たちの口に入るものに転化していくことができるのか。この、食べられないものを食べられるものに転換していくプロセスというものを理解する。それが体験にこめられた教育的な価値なのではないかと思っています。

次にライフスキル論との相違について考えて行きたいと思います。ライフスキル論も色んな論調があるかと思っていますので、一言で言うことはできません。ただ、ここでは、やや単純に技術主義という風に置き換えて考えていくことにします。この問題を私が感じましたのは、昨年、九州の社会教育研究大会が佐賀で開かれて、その時に通学合宿の報告がありました。その通学合宿に対して、このような質問がありました。「通学合宿というのが今、全国各地で取り組まれていて、そして、上手くいっているというふうに思っているかもしれないけれども、実際に子どもたちが通学合宿が終わったら、家に帰り、日常生活に戻ったら、何もせんじゃないか。一体何の効果があるのか。そして成功した、成功したというふうに言われるんだけど、まだまだ実は生ぬるいのではないか。もっと子どもたちに負荷を与えていくべきなのではないか」という議論が展開されたわけです。お気持ちは非常に分かります。つまり子どもがやっぱり甘やかされて、身辺自立、また生活的な自立というものができていないという問題提起を出されたら受け止めたわけなんですけれども。しかし、この議論の危険性というものは、子どもに、では一体どれだけの負荷をかければいいのか。甘やかされた子ども観というところから出発しますと、どう

しても体験の量を大きくして、そしてそれが、この厳しい世の中で、競争的な社会の中で子ども達が勝ち抜いていくためには更なる鍛錬というものを組み立てなければならぬのではないかというような、鍛錬主義に転換し展開していくのではないかと感じられるからなのです。そしてもう一つは、生活体験学校の九野坂さんとの議論の中から問題ではないかと指摘したんですが、生活体験学校に来る子どもたちの親の中で、「うちの子どもはもう料理ができますから参加しないでいいでしょう」、「うちの子はもうお風呂が炊けますから参加しないでいいでしょう」というふうに言われて参加を渋る親がいるという話なんです。では、これは一体なんなのかということを考えてみたときに、一つ一つの生活の技術、ライフスキルというものは、確かに重要なことであるわけです。しかし、その生活技術が身についたから参加しなくてもいい、というようなものを私たちは生活体験学習というふうに考えているのだろうかということなんです。私たちが問題にしなければならないということは、もっと別のところにある。その別のところにあるものの一つの中に、そういったライフスキルというものも位置づくわけなんですけれども、何かができるようになったら参加しなくてもいいという考え方は、何かの技術を身につけるためには生活体験学校に行くのではなくて、鉛筆を研げるようになる学習塾のようなもの、飯合炊飯ができるようになる塾のようなものに子どもを行かせればいいのかという議論につながりかねない。これは、都市部においては、たとえば、幼稚園の入学試験ですとか、あるいは小学校の入学試験なんかのときに身辺自立ができているのかどうか、自分で鉛筆を研ぐことができるのかどうか、というような負荷を課していく。そうしますと、親の志向性としては、そういうことができるようになる学習塾はないのかと、うちの子が出来ないことは、そういった生活技術を教えてくれる学習塾にやればそれで済むのだという認識につながりかねない。しかし、私たちが問題にしているのは、そういったことではないのでしょうか。

三つ目には、伝統芸能への着目といったことを言ったわけですが、今日の午前中もいくつかの地域のお祭りに関する調査の報告があったかと思えます。私自身はこの祭りの持っている教育的な価値は非常に重要な

ものがあると思っております。しかし、今日の奉仕体験の殊更の強調であるとか、義務化が推進されていくということには、あるマイナスというものも感じざるを得ないわけです。祭りというものは、当然その地域への着目、また地域への愛着心というものも養成していく。その限りでは、非常に重要なものだと思います。日本の教育の歴史というものを振り返って見たときに、郷土への注目がなされている時期は、郷土を芯として、そこから同心円状に国家を愛するという、愛国心の形成ということが同時並行で行われてきたわけです。つまり、祭りへの着目ということは、ややもすると、ナショナリズムへの傾斜というものを持つのではないかと、伝統と愛国心への回帰というものが知らないうちに進んでいくのではないかと私は考えております。そこで、別の観点から祭りというものを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。一つは、祭りが行われるということは、そこには祭りの組織というものが必ず組織され、そして必ず祭り組織の中には子どもの組織というものが位置づけられ、子どもの出番というものが祭りの中には必ずあります。そして、もう一つは午前中、庄内町の神楽の報告があったかと思えますが、神楽にしても太鼓にしても、これらの技術というものは、一朝一夕に身につくものではない。つまり、学校の学力のように、今日教わったことが明日できるようになるというようなのではなく、長期間にわたって練習を積み重ねていかないと我が物になっていかないという質のものではないのでしょうか。これは、部活などのスポーツとも共通しているものがあるかと思えますが。このように祭りへ注目するということは、子どもの出番というものが地域の中にあるのか無いのか。それと、そこで考えられる基本的な価値というものは、子どもにとって長くやっていかないと手に入らないものというのがそこには隠されているのではないかということがあられるわけです。そこから考えてみたときに、祭りの持つ基本的な価値は何かということを改めて問う必要があると思っております。

最後にこのような生活体験の空間というものを私たちは創造していくことが求められます。私は午前中「再生」と言いましたけれども、「再生」ではちょっと意味が違うのではないかという議論があって、再生・創造、

どちらでもいいですけども、そういうものを作っていく必要がある。つまり、生活体験学校と呼ばれるものと、生活技術を教える塾との相違はどこにあるんだろうかということを考えてみたときに、基本的な生活リズムというものを子どもたちに獲得させていく意味と、それからもう一つは、祭りや料理などもそうなんですけれども、上達していく喜びというものを実感できるチャンスと言いますか、そういう機会を保障する場として生活体験学校、生活体験学習というものは存在しているのではないかと。まとめていいますと、私たちが生活体験学習というものを問題にしていこうとするときに、その目的というものは、子どもが生活の主人公になっていくのであるとか、生活創造の主体というものをどのように作っていくことができるのか、それを生活体験学習学という領域の中でどこまでやることができるかどうかというのが、実はこの学会の課題でないかと考えているところです。以上です。

南里

ありがとうございました。今、生活体験学習の理論的、実践的枠組みを捉える時は、生活体験の陥りがちな、体験主義・技術主義・鍛錬主義・郷土主義等を捉え直す必要があると言われました。そこで、こうしてはいけない、または、こうするとこういう方向性が出てくるという、いくつかの前提として考えなくてはいけないことで、生活体験の欠損・収奪と、豊かさの過剰供給の抑止という二つを前提とされているように感じました。そこで子どもの生活の基本、もう少し突っ込んで、ストレートに言わせていただくと、上野さんは子どもの基本能力、発達課題や生活能力、今の生活の問題とか様々な状況が変化していく中で置かれている状況、ないしは獲得していくプロセスというものは子どもの教育の中で何をどうするか。その何をというところが、基本的能力なのか、発達課題なのか、生活能力としてのスキルなのか、そのことについてお答え頂けませんか。

上野

私が今考えているところでは、子どもの発達基盤の揺らぎといいましょうか、国民生活の急激な変化に伴う各家庭における子どもの発達基盤の大きな揺らぎというものがあって、そこに子どもの発達をゆがませていく原因というのがあるのではないかと考えています。

南里先生の最初のところで、共同体を基盤にして、また家庭生活でもそれを基盤にしてという風に言われており、それを再生していかなければならないという筋道の議論を立てることが可能かと思うんです。けれども、各家庭に委ねられた子どもの発達の基盤というものが消失していったのではないかと。かりに各家庭で基盤があるのだとしても、親が子どもに教えるということだけの基盤性を持ちえているのか、基盤でありえているのか。そこでは実は、親の生活スタイルというものに子どもが順応していかざるを得ない。したがって、長時間のテレビ視聴であるとか、睡眠時間減少というものが生み出されてきているのではないかと。収奪というものからどのように守り、また過剰供給されている豊かさというものをどのように抑制していくのか。その抑制力と再生というものを両方一緒に考えていかなければならないのではないかと。私は今考えてるところです。

南里

また後で、皆さん色々質問されるところがあるかと思いますが、非常に難しいところでございますが、今の子どもたちの置かれている状況を、地域の共同性、家庭の協働性の中でどのように捉えていくのか。その次は、基本的な子ども自身の個性や子どもの発達課題という問題をどのように捉えるのか。そして、結論としては、豊かさの抑制の乏しさということが、子どもたちそのものをゆがめてしまっているということになるかと思えます。

では、次に当学会の副会長で、しかも、生活体験学校の校長先生とも呼ばれている正平先生にお願いします。

正平

正平でございます。私が今の生活体験学校で行なわれている通学合宿の原型である通学キャンプというものに取り組んだのが昭和58年で、かれこれ20年くらいになるわけです。今日のシンポの奉仕活動・体験活動の原理を問うとなっておりますけれども、両脇の二人の先生方は学者先生でいらっしゃるから、原理を問う必要があまりないでしょうけれども、私は今まで原理を問うたこともないし、ましてや生活体験学習学の構築を、とんと、目指していないわけです。目指さなくても、私どもの生活体験学校における活動という

のはあんまり支障が無いと思って、20年間やってきたわけで、なんかここに座っているのも場違いみたいな気がするんですけども。上野先生の話はずっと聞きながら、もう10年以上ウィーンに住んでる友達に毎月「生活体験学校の日々」という1800字くらいのエッセイを書いた雑誌をずっと送り続けてるんですが、「正平さんのやっている生活体験学校というのは、昔の生活技術を教える場所ですね」とか書いてきておりました。その葉書を思い出しました。生活体験という言葉がやっぱり頭の中にくっついて離れないのは、何といても子どもの実態ですよ。たとえば、キャンプというプログラムの場合、昔から僕も一泊二日のキャンプにしろ、二泊三日のキャンプにしろ、自然に触れ合わせて、人間関係を濃密なものに再構成したいとか能書きばかりタラタラ書いてキャンプをやってきたんですけども、自分でやりながら、「こんなことやって、自然との触れ合いとか起きるわけなかるうもん」、「たった二日くらいで、何も触れ合わんうちにまたうちに帰る」、「人間関係の再創造と言ったって、なんが人間関係か。泣いてから逃げ帰る子どもも何ぼでもおる。再構成なんてできるわけないだろう」と、思いながらずっとやってきたわけです。けれども、通学合宿を始めて、やっぱり、子どもがいろんなことができないといっても、なんとか程度の問題です。「皿を洗え」といえば箸を洗わん、「箸も皿も全部洗わんか」とどやしつけよったわけです。びしょびしょになった流し台は誰も拭かんでしょ。あるいは、その10分か15分後には始まるという飯作りや畑の作業の説明を九野坂君がしているのに、その説明をほとんど聞かない。聞いてないから仕事が始まってもどうしていいのか分からん。分からんなら両隣がしてるのを見てまねしてすればいいのに、何もしない。ボサーッとしてる。これはですね、生活体験学のなんのというレベルではなくて、子どもが人間として暮らしをやっていくに必要な最低限のことを親からなんにも教えられとらん。惨憺たるもんですよ。処置なしという感じですね。

それは確かに、コンビニがあって、準備のいらん生活ができる。そりゃあそうかもしれませんが、人間70年も生きるこの世の中に、一日もコンビニが欠かさずにあるという人生を送れりゃいいですね。しかし、3日でもコンビニが無かったら、食わんで済ますわけに

はいかん。そりゃあ、70年の人生のうちのたった三日、しかし、たった三日でも死んでしまう。そんなもんでしょ。マッチは擦れなくても生きられます。ガスもありゃ電気もある。70年一日たりとも電気もガスも全部必ず揃ってる暮らしを誰が保障するでしょうか。知り合いのお医者さんが言ってました。アジアのボランティア活動で、医療活動に行っって、一番先に具合が悪くなってくたばるのは日本人です。清潔で立派なところで暮らしてるから、ハエも蚊もぶんぶん飛び回るような、野グソをしないと暮らせないとところに行ったら、そりゃあ病気にもなりましょ。ボランティアに行っって、自分が病気になってたら世話はない。なんでこげな子どもがいっぱい出てくるようになったかな。

庄内は庄内で固有の歴史と経過がありますから。人口二万人だったのが昭和37年と38年、二年間で人口が半減したんです。それだけの地域崩壊を経験すれば回復しようが無い。子どもに著しい深刻なダメージがあることはよくわかっている。だからそんな子どもが、福岡県や日本全国の標準的な姿を写しているとは僕は思ってません。独特のやっぱり深手を負っている、負荷を持っている部分がある。でもそれを割りひいてもちょっと酷すぎる。何故こんな子どもが出てくるようになったのか。まあ、色んな理由はあるとは思いますが、やっぱり地域社会の、人間関係がバラバラになってしもうて、そして大人の集まる場所銭の儲かる話のところには大人は集まらない。「何をすれば金が儲かるとや」っていう話に大人たちは目の色変えて集まるわけで、だから子どもが金こそ命、金が一番大事って言う考え方をもって、他の事みんな関心ばらばらになってしまうのは当たり前のことです。そんな風に大人が一生懸命教えてきたわけですから。子どもが生まれるときに財布を握って生まれてきたわけじゃない。金こそ命、これこそ大事ということを誰が教えたか。今の大人がみんな寄ってたかって教えたわけです。他の事はたいした値打ちが無いと思うようになっても仕方が無い。そういう状況になってきている。隣の人間が何しようと思ったこっちゃない。他所の子どもが何をしようかと余計なことは言わん。そういう社会を作ってきてずっとまた何十年と時間がたってきたわけです。このままでいけば、これはもっと酷い状況になりますよ。そういう風に地域のつながりがバラバ

ラになってきている。そういう地域社会では、子どもたちに、今まで我々が身につけてきた物言いか、態度とか、物腰とか、ありとあらゆる人間の行動様式を子どもに伝えることはできません。体験というのは、人の真似をするところから入っていくわけですからね。形をなぞるところから、それを繰り返す、繰り返しながらいろんな生活態度、色んな礼儀、色んな技術、色んなやり取りを学んでいくわけでしょう。そういうものが一つ一つブツブツに切られてしまっている。

確かに、戦前言われた滅私奉公は、こりゃ粉碎されて跡形も無い。結構なことですよ。ところが気がついてみたら、滅私奉公が無くなったのは良かったけれども、滅公奉私になってしまってる。ワタクシこそ大事。公？ さっき先生が言われたかと思いますが、「そんなことは俺の知ったことか」という社会になってしまったわけですから。九野坂君がいつか話していたように、公民館の傍のガードレールに落書きしよる。中学生に、「そんなこと止めんか」と言ったら、「このガードレールはおじさんのもんか？」と中学生が開き直ったという話があります。そういう社会になってきたわけですね。ですから、ことはきわめて深刻で、私たちがこの15年、生活体験学校を拠点にして通学合宿を年間20回くらいやってきて、分かったことといえば、きわめて簡単明瞭なことですよ。「子どもはやったことが無いことはできません。」「教えられていないことは分らん。」この2つです。一見、当たり前で殊更言うことでもないような事柄を、今、親たちも多くの大人たちも、「この子は小さいけん何もできんとやろう」、「中学生や高校生になったら分かるようになるやろう」、そういう風に思っている節がある。そんなこと絶対ないんです。やったことの無いものは、大人になってもできん。そういう大人が子どもの親やないですか。教えられんままのことは教えてやらないと分からないんですよ。それを子どもにやらせたり教えたりということは、たとえば、家族で忍耐強く、繰り返し繰り返し子どもに教えてやって、半分しかできんでも9割できたごと言うて、褒めて褒めあげて、教えていって、やがて本当にできるようになるわけですよ。

今の子どもの育て方というのは、核家族、バラバラの家族。核家族で子どもを育てるということは、祖父母の世代の人生経験と子育ての経験を全く生かさない

社会で子どもを育てるとのことなんです。人生の経験も祖父母の世代の半分、子育ての体験などは祖父母の世代の半分も無いような若い夫婦だけで子どもを育て続けて何十年、健やかに子どもが育つはずが無いような社会の仕組みをずっとやってきた。それを補完するような格段の手立ても、格別のこともたいしたことやってこなかった。

今、子どもたちが全く教えられてない領域として3つあります。一番目には、子どもは、働く、生産するというをほとんど教えられていない。その逆に、消費する、使うということをしっかり体験してきました。二番目には、しちやいかんこと、いいことと悪いことも厳しく教えられていない。言葉で親が子どもをしつけようとするから、だから躰ができていない。3つめ、他人と共に暮らす喜びと苦しみもほとんど経験していない。この3つの領域の体験が、明確に欠落している今の子ども達のこれからというものは、余程これから、われわれが腹をくくってこれまでやらなかったような手立てと、それから特に大人たちの横のつながりや連帯感のある大きな力、強い取り組みを掲げてやっていかなければ改善することはできんと思います。

確かに、地域でも社会教育でも、色んなプログラムをやってます。でも、大成功だった子どもの活動・プログラムといっても、1000人の小学生のうち、100人くらいしか参加していないんです。社会教育の様々な事業で大成功だったといっても、全体から見れば5%か、ほんの10%くらいの参加率です。およそ、その効果を遂げるだけの質も量も提供されとらん。だから私がお試しセット、薬品で言えば試供品と言うんです。効果が上がるようなプログラムはほとんど用意されとらん。そこんとこの現実をピシッと認識するところからしか出発はできないのではないかと考えているところです。

南里

ありがとうございました。正平先生と私は同じ世代だと思えますけれども、先生のお話を聞きながら2つのことを考えました。一つは生活体験学校の立ち上げの時のこと。それからもう一つは、大人の問題。先ず、庄内の生活体験学校を立ち上げるまでは青空学校から始まって、地域公民館・自治公民館の段階を繰り返しながら、さらに生活体験学校の建設後は生活体験の学習を作ってこれ、そして今日まで来ているわけ

なのですが、生活体験学校の実践の枠組みそのものはほとんど変わってない、同じカリキュラムをやっている。そのことを聞いて僕はホッとしたのですが、生活体験学校の子どもの生活はだいたい何年代をイメージされてやってこられたのか。消費生活とか、労働するとか躰けたり、そういう課題を、何年代の生活イメージで意識されたのかな、と言うのをお聞きしたい。

もう一つは、親世代が問題があると言われる。ライフステージを考えて、年代を考えていくときに、今、時代性の中で親の問題として子どものことを考えていくことを考えていかないといけない。それは、先生から見られて、何歳代の親たちまでを考えてやってもらえるのかをお聞きしたい。

正平

確かに立ち上げるときはですね、色んな、今日出されているような文書も色々書きました。でも、やっぱり「それはなんですか」、というのがありました。まあキャンプ場でテント張りながら学校に行かせたことを、館を建ててそこで、負荷を軽くして、その分年間何回も何回もやるんですと。今もう20回やってますからね。そんな言い方でやってきたんですけれども。やっぱり最初の何年間かは、「通学合宿というのはこんなことをやるんです」と言うのと、「なぜ、そんなことをやる必要があるんですか」というのを、繰り返し繰り返し説明しました。なんか子どもが喧嘩したと言えればそれを説明し、なんか学校でトラブルしたと言えればそれを説明し、というのを繰り返し繰り返しやらなくちゃいけなかった。やっぱり、4～5年くらいは説明の繰り返しだったと思いますね。4～5年はかかると思います。で、その時期を過ぎると参加した子どもや参加した親達が、「あそこに行ったら、ああするんです。たまには肥え汲みもさせられて臭いけどもやらなきゃいけないんだ」と、色々説明するから、我々のサイドから色んなことを説明することはなくなってきますね。それで、この前愕然としたのが、一番最初に通学合宿に来てた子どもが母親になってきていまして、私に、「正平先生」とか言って。今、私に声かける母親はいないんですよ。「九野坂先生」と言う人ばかりで。私はもう、昔の遺物みたいなもんですから。なんで私のこと知ってるのか、と思ったら、最初に通学キャンプに来た子どもが、わが子を4年生の通学合宿に参加させて、親とし

て来とったんですよ。僕はもう、爺さんになったんやなあと思ってがっくりきましたよ。そういう状況ですから、通学合宿として今やってるスキルやなんかについて個々の質問はあんまり、最初の頃のくだらん質問は来なくなりました。それでも、私が応対したわけじゃないけど、たとえば、「6泊7日は長すぎるから3泊4日にしろ」とかね。そういうことを言うてる親が、今出てきてるらしいんですよ。私は電話に出ないから、「もう15年も前からやっとする6泊7日を、あんたの息子や娘に合わせて3泊4日にしろ？何をふざけたことを」と言ってやりたいくらいですが。そういうことをぬけぬけと言ってくるという状況に今、なってます。さりとして、昔のようにやかましく言って、親を頭ごなしにどやしつけて何とか変えようとか、そういう古いタイプの取り組みはもう全然やっても無駄。効果が無い。だから去年の4月から始めたように、この草木染の先生にお願いして、お母さんたちに「あなたたち、草木染したいですか。少し上手くなったら通学合宿の子どもたちに教えてくれますか。」と約束する。もう半年もしましたら、通学合宿の最終日に子どもに、小学生に草木染を教えてくれるんですね。それを本当の先生が後から見てる。そして、とうとう11月の文化祭のときに、そのお母さんと小学校2年生の子どもの草木染で作ったハンカチの展示が、並べてありました。親がほんとに面白がってる。そういったことが、親も子どもを巻き込んで一緒に体験していく。そして、親も子どもも面白がりながら、だんだん全体的な水準が上がっていく。そういうプログラムを沢山作っていく。そういうプロセスの中で、親も子も少しずつ変わっていくんじゃないだろうか、と僕は漠然とそう考えております。

南里

どうもありがとうございました。キャンプの時から変わらない。実は生活体験学校の中身というのは、学年が低年齢化している以外はほとんど変わってない。まさに普通の、普通の子どもの、その生活を体験しているということを今言われたのではないかと思います。それからもう一つは、観念の変革としての大人の変革はありえないということです。この点は私も最近凄く感じる事なんです、大人の学習や、子どもの体験学習を、大人も子どもと同じように、どの世代である

かによって、その世代での生活状況を考えていかなければいけないと思われま

では、次は、日本社会事業大学の辻さんです。辻さんは、福祉関係が専門で、社会教育学、福祉と教育を担当されています。ボランティア学習学会の方で活躍されています。

辻

私はこの学会の会員ではありません。初めて皆様方にお目にかかります。辻と申します。東京都の清瀬市にありますが日本社会事業大学の社会福祉学部にて勤めております。私は、社会教育をずっと勉強してきたこともありまして、福祉とまちづくりを進めていくときに、住民参加ということが必要だというようなことで、福祉領域でそんな形で仕事しています。今日、ご依頼がありましたのは、実は、日本福祉教育・ボランティア学習学会という、出来て8年くらいの学会なんですけれども、その事務局長をしていたときに、「奉仕活動の義務化」という提案がありました。そこで、それを受けて、学会でどうしようかというようなことで、色々調整に当たったということなどをお話しするようというご依頼がありました。初めにそんな話をさせていただきながら、後は少し思いついたことを加えたいと思います。

今日のテーマは、生活体験学の構築ということで、いろいろ思いつくことを書いてみましたが、私のテーマにありますように、教育的価値をどのように考えるかということに、私なりに焦点をあてたつもりです。教育的価値と申しますと、何かこういう価値を教えましょう、みたいな話をするのかなと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではなくて、教育的価値を、どのような関係の中で見つけていけばいいのかというようなこととお話したいと思います。南里先生の最初のお話の中では、あるべき生活体験学習を固定化しないで、実際の地域環境・文化環境の中で考えていこうということがありましたが、そのことと関連して教育的価値というものを、今、教育学の世界でどういうふうと考えていけばいいのか、この生活体験というものに絞った時に、こんな視点があるのではないかと話させていただこうと思っております。

始めに、「奉仕活動の義務化の提案の受けとめから考える」という項目を立てましたけれども、2000年の9

月に、教育改革国民会議の中間報告が出されまして、奉仕活動を義務化するという提案がなされました。高校が終わった時点で18歳の時に丸一年間の義務化をする。そうすると、大学なんてのは学生が来ないのではないかとことも笑い話で出たりするような提案でした。ちょうど、私たちの学会の方で、9月の下旬に理事会がありまして、そういう提案が出たので、何か対応しなければいけないんじゃないかという話で、11月に総会があるものですから、その総会に向けて、何か声明でも用意しようかと思ったわけです。そうしますと学会ですから、早急に過激な声明というのはいかなものかとか、そんないろんな声があって、まずは11月までに学会員の声を集めましょうという話になったんですね。あまり長く書いていただいても困るので、800字くらいで意見をお寄せくださいということで、1ヶ月くらいの方に意見を書いていただくことにいたしました。

それに対して、19通の回答がございました。それを見ると、賛成だという意見は1通も無いんですね。皆さん最初は、反対であるとか、おかしいと思うとか、ボランティア、教育改革国民会議は、ボランティアとは言っていないですけども、ボランティアのような活動は、自発性というのを命としているのに、それを義務化するというのは矛盾ではないかというように書き方で、おかしいと思うということから書き始められるんです。しかし、文章の後半になっていきますと、「奉仕活動をさせる場所を誰がコーディネートするのか、そういうコーディネーターを配置しなければいけないんじゃないか」とか、あるいは、「森林だとか、農作業の体験はいいけれども、福祉現場で体験してもらうのは困る。なぜならば、福祉施設というのは、そこに入所している人にとっては、家と一緒にわけですから、そういうところに義務で嫌々やってくる人が来るっていうのは、全く心外だ」と。農作業だったらいいです、みたいなそういうような回答を頂いたんです。

その時に、実は私も19通の中の1通を書きました。私が思ったのは、私の子どもはその当時、2番目が男の子なんですけれども、4年生でした。「1年間18歳の時に、奉仕活動で家からいなくなって、そういう活動をするっていうのは、徴兵制と変わらないんじゃないかと。わが子を徴兵制にとられるのか」とすごく思い

ました。中間発表が出た後、『文芸春秋』の座談会で言いたい放題言ってるもんですから、本当にこれは徴兵制の一里塚だと私はすごく確信をもって、それで、事務局長であるにもかかわらず、すごく過激な文章を書きました。しかし、多くのそういう実践をしておられる方々は、一応反対、といった結果でありました。

そういう意見の集約をした後で、1年くらいかけて、「声明ではなく報告書を作っていきます」というようなことになっていったんですけども、そこでも、ほんとにすごく問題がありました。時間がないので、簡単に言いますと、骨抜きといいますが、過激な文章は全部削除されるという事態になってしまいました。

もう一方で、社会教育推進全国協議会という団体がありまして、こちらは運動団体でありまして、そちらの方でリーフレットを作ることになり、私を書くことになりました。こちらはかなり反対という調子が認められたのですが、それでも、現場は困っているから、こういう風なことで進めたらどうかと書いてくれと言われたりしました。私はそれを書く、結局その条件をクリアしていけば、そのことを許すってことになるから嫌だと言ったわけなんですけれども、やっぱり「書け」と言われるもんですから、しぶしぶ、最後に、子どもの意見表明を大事にしましょうということだとか、それを支援する指導者の充実が大事だとか、そんなような文章を書いたリーフレットとができあがりました。

ここで、申し上げたいことは、奉仕活動を義務化していくというとてもない提案だと思うんですけども、そのことに対して、まっとうに意見を言うことが、実は非常に難しいということなんです。私はその時に、戦前ファシズムに走ったときというのは、こういうことだったんじゃないのかなと思いました。それぞれの人が何らかの立場を慮ったりしながら、言いたいことを堂々と言わないということがあったのではないかと思います。それと、もう一つすごく恐れを抱いたのは、新聞などでのアンケートの中で、賛成の人が半分くらいいたことです。要するに、反対と賛成が大体半分くらいという数字が出ていて、私、それを見て非常にびっくりしたんです。ところが、コメントを読みますと、大人が今、子どもや若者たちにムカついているというように書いてありました。ムカついている大人

たちが、子どもをもう一度鍛え直さなければならないと思う空気がある世の中であって、そういう人たちが、かなり奉仕活動に賛成をしているということで、それも怖いなって思います。

結局、レジュメにも書いておりますように、こういう奉仕活動などを考える場合に、真空状態の中で体験活動というものを論じていいのか。私が関わっているボランティア学習というところ言えば、ボランティア活動というものは、政治的な動向というのとは全く無縁に、心ある人が活動する。あるいは、生活体験というものを、政治情勢がどうであれ生活経験って大事じゃないかと考えて、政治の状況と切り離されたところで、こういうプログラムは有効ですよという研究がとても沢山あります。そういう研究スタイルがいいのかどうかを問わなければならないと思います。今置かれている状況の中で、生活体験をさせていくということが、将来にわたって、あるいは社会全体にとってどのような意味を持っているのかという、そういう真空ではない、まさに政治的な情勢の中で、ものを考えていくというのが体験活動の研究であり、実践ではないのかというように考えるようになりました。お分かりだと思いますが、私は当然真空状態で考えるのが実践として危険であり、学問としても妥当ではないと考えている立場です。生活体験学習を、「学」というふうに打ち立てていく時に、その、どっちが学問として正しいのか、私のような人間に対する批判もあると思います。政治情勢で右往左往するのは「学」ではありません、そういうものとは全く切り離されて、普遍的方法や価値を見つけていくべきでしょうというお考えの方もおられると思います。しかし私は、そういうようなことが、政治の過程に入った時に、とても危険なファシズムに巻き込まれるような役割を果たすのではないかと。そのあたりのことを「学」として構築していくときには、何としても考えなくてはならない、重要な問題なんじゃないかと思っています。

1つ目のテーマだけで時間を取り過ぎましたけれども、以下、少し思いついたようなことを書いておきます。まず、「学校としてのプログラム化か、教育の第三領域か」という議論があると思うんですね。東京大学で社会教育を研究しておられます佐藤一子先生が最近出された本の中では、「総合的な学習の時間」でありま

すとか、あるいは学校に対する住民の支援活動というものが今盛んになってきているけれども、それに対する一つのキーは、「学校的な価値」というものが、社会一般を席卷してしまっているのではないか。子どもたちが生活体験をするというのは、学校的価値とは全く切り離された学校でも家庭でもない、第3領域として独立の価値があったのではないかとことです。これは古くから言われていることですが、最近の動きというものはそうした第3領域のものとして認めないで、学校的な価値を追求している、そういうことがあったのではないかと指摘しておられます。

学校的な価値を追求する場合に、午前中のご報告でも発表された方がいらっしゃるんですけども、アメリカ等でのサービスラーニングというものは、明らかに学校的な価値をきっちりつないでいこうということです。私もアメリカの方の報告をうかがったことがあります、その方から聞いたのは、サービスラーニングという体験というものを入れることによって、子どもたちのペーパー試験の学力が落ちたら、それは失敗だというように明確に言ってるんですね。要するに、ちゃんとした抽象的な思考ができる、そのベースとして、体験というものがなければいけない、というふうに言っているわけです。そういうはっきりした立場がある一方で、佐藤一子先生も指示していらっしゃるかと思うんですが、学校的価値の相対化を目指すような子ども組織の教育、全く学校的価値と切り離された何か別の世界というものがあっていいのではないかと議論。そんなような議論を両極においた場合に、今、「総合的な学習の時間」はどこに位置するのかということが気になります。基本的には、学校教育の一部でありますから、学校的価値の追求ということなんでしょうけれども、いかにも中途半端という気がしているところがございます。

それから次に、子どもの参画ということですが、体験活動をしていくときに、大人のお膳立てでは問題だ、子どもの自治能力を形成すべきだという議論。これも古くから言われていて、今は早稲田大学におられる増山均先生が、日本福祉大学におられたときに、そんなことをずっと言われていたと思っております。ただ最近はそのから更に踏み込んだ状況が出てきていると思っておりますが、ロジャー・ハートという人が出された『子

どもの参画』という本の中では、子どもと大人が対等の立場で社会参画することが提案されているんです。大人が何もしないで、子どもに体験をやれと言っても、という問題。あるいはボランティア活動などで、学校に支援に行く住民の方の多くが言われる、学校の先生がまず、体験しておかないとね、ということです。だから、子どもだけにさせるではなく、大人と子どもが何かを一緒にやっていくということが、子どもの参画という議論の中で出てきているのかなと思っております。

それから、上野先生のご報告の中にもあったことですが、生活体験ということと、労働の問題という問題があると思うんですね。生活教育論という伝統的な教育の世界で行われてきた中では、現実の厳しさというものをとらえる際に、やはり生活の中心に労働があったというように思うんです。でも、今の生活体験は、厳しい労働というよりも、少し甘い部分での生活体験というのがあるかなというふうに思います。そして生活体験というものが、ある種、階層性を越えると言いましょうか、生活を見つめた場合に、たとえば母子世帯の方っているわけですし、あるいは兄弟が障害を持っていて悩んでいる、そういう子だっているわけです。あるいはお父さんがリストラにあったというような家庭の子どもだっているかもしれません。かつての生活教育論は生活綴り方などを通して、そういうようなことを取り上げてきたんだと思います。でも、生活体験学習といった場合にそういうものまで踏みこんで議論していく覚悟があるのかどうなのかというあたりが、やはりこの、生活体験活動を「学」として構築していく場合には大事なことだろうと思います。時間が来ましたので、最初の報告はこれくらいにしたいと思います。

南里

どうもありがとうございました。最初の奉仕活動のいきさつを聞いて、辻さんをおとなしい人と思っていたんですが、色々再認識させていただきました。一つだけですが、大人と子どもが対等に社会参加するという問題と、それから階層性を越えるというような問題を、だいたい言われたと思いますが、階層性を越えるというのは大事な問題だと思うので、説明を願いますか。

辻

もう少し前だったら、階級性というのかもしれませんが、無難なところで階層と言いましたけれども、そのことを考えるのに二つの面からせまってみたく思います。生活体験といった場合に、先ほど申しました勤労奉仕活動の問題があると思います。それからもう一つは生活体験といった場合に20年以上前になりますが、私が学生の頃などは総合技術教育という旧ソ連の教育が非常に重要な議論になっていました。上野さんのご報告がそのことを言っておられたと思うんですけども、労働というものは、外界に働きかけて、内なる自然を変えていく。たとえば木鉛筆を削るという行為によって外界に働きかける。そういう仕事を通して、自分の中の能力を発達させていく。そういう議論に導かれて、働くということは、勤労奉公、滅私奉公ではなくて、自然の法則を知っていくこと、そして自然の法則を知っていくことによって、自分が賢くなっていく。そんなことが、最近の議論と昔習ったことなんかで思い起こされます。

それともう一つは、働くという場合に、新しい働き方という議論が今出てきているかと思います。要するに、公務員になったり、会社に勤めたりするのではなくて、地域の人たちに本当に求められる仕事を安い賃金だけでも、頑張っけてやっけていこうというものです。古くは障害者の共同作業所づくりに飛び込んでいく若者とか、学童保育というのもそういう世界であったかと思いますが、最近は、フェアートレードの喫茶店とかがあると思います。今、思いついたんですが、そのフェアートレードというエクアドルから有機農法で作ったコーヒー豆を仕入れている会社が福岡にあるんです。そういうところと連携しながら新しい価値をつくっていく仕事をする、していこうとする若い人たちの考え方があると思います。そういう体験という場合に、働くということをどういうふうに考えていくのかっていうのが大きな問題だというように思っているということが一つです。

それと、南里先生からご質問いただいたように、先ほど言ったことの繰り返し以上言えないのですが、生活と言った場合に、貧しい子どももいれば、いじめられている子もいるでしょうし、あるいは高等学校などでは、どういった経緯でその学校に入ってきたのか、

不本意入学という問題などもあるのではないかな。そんなような問題を取り上げていく必要があるのかなのかということ。そういう視点も無く、生活が大事だとか、生活を見つめていこうといったことを言っていると、何か虚しいのではないかなというようなことを感じております。

南里

どうもありがとうございました。また後で、少し話をしていきたいと思ひます。

では次に、厳木町で高校の先生をされていて、実際に生徒たちと地域ボランティア活動を続けてこられた進藤先生にお願いしたいと思います。

進藤

何を言ったらいいんでしょうか。言葉が今いっぱい出ました。だから整理するので精一杯です。失礼ですが、皆さん方の中で高校の先生はいらっしゃいますか？手を挙げてください。…いない。はい、分かりました。それでですね、大体流れを追ってきていると思うんですが、流れが止まるかも分からないですけど。

普段は私、こんな格好じゃない、もっとラフなんですけど、今日は卒業式でした。卒業式終わって11時半、こちらに飛ばしてこちらに来たんです。場所はですね、天山スキー場の裏です。大体山の中を想像されたら分かるかと思いますが、そこに住んでる子は、山のおりの子です。素朴です。うちの学校は、元々、厳木町挙げて応援してる学校だったんです。ですが、どこの地域にでもあるように、都市部の、つまり都市って言っても唐津市ですが、唐津市の海の子たちが、学校って輪切りにされますから、輪切りにされて一番最後の輪がくるんです。正平先生が言われたように考えられんことをする子たちが仕上げにやってくる。最初は厳木町の生徒がいたんですけども、それがだんだん減ってくる。普通校ですが、成績は下の下です。商業高校より悪いですね、という学校でした。少子化で学校再編の矢面で、私が来たときには、もうあと三年くらいやれるかなと。校長がちょっとまあ、正平先生くらいすごい、ちょっとした傑物が来たお陰で学校がすごく変わりました。厳木町なのに、厳木町民から声もかけてもらえない学校。要するに生徒がどういう状況かという、生活体験以前ですね。人としておかしい、とお礼も言えないし、言う気もないし。学校の名前も堂々

と言えない。つまり、帰属意識が無いんです。目的意識も無い。年間に、30人ぐらい辞めるんです。4クラスありますので、160人の入学で、卒業するときには130人になります。1クラス無くなるわけです。そういう学校です。

それをどうしたかと言うと、着目視点が良かったんですが、厳木町は昔炭鉱で、いい駅があったんですよ。その駅に注目して、生徒を地域に出して、地域に戻そう。着眼点が良かったかと思います。

佐賀新聞社社会大賞というのがあるんですけど、これに応募して当たった、と言いますか、受賞した作品です。その時のものを載せてます。この学校に来る前は、ボランティア研究校の研究主任をしております、ボランティアとはこういうもんだ、と思っていました。最初にボランティアやれてと言われてですね、はっきり言って、敵は、教師なんですね。みんなやりたくない、と。やりたいのは俺たちだけ。まず、先生をどうにかしないといかんですね。それで、自分の授業、つまり、ボランティアを教える授業というのが、二年生に二時間、三年生に二時間ももらいました。施設訪問などもうやれるようなことは全部やってみました。最初は、厳木駅の美化をしようということで、駅を掃除区域にしまして。だから駅が校門ですから、駅でタバコを吸ったら校内喫煙になります。夕方もしますが、朝もやります。朝通学するとき、三年間やれば三年生は「今度の一年生は横着ね」と言います。二年前は自分たちもそうだったんです。三年間かかって違うようになったんです。三年間すると、150名くらいの生徒の中で、駅や列車の中で、今やってるのは、勝手にやってるんですけど、ゴミ袋を出して、ごみを拾って降ります。後からごみ箱の中にボンと入れるというのが、4、5人は出てきている。ごみ拾いなんて…と言われてますが、数で勝負です。プリントの4番目に書いてありますが、一年間の延べ動員数が、9000超えた。なんせ、450人しかいません。一人20回です。6ページ、左側です。駅の清掃活動、これが一回、勤労体験学習も一回。あと、土曜日があるんですけど、土曜日の午前中に駅だけでなく、施設も全部行きます。町内の施設は全部行きます。施設という施設。浄水場であろうが、役場であろうが、全部掃除に行く。私が本当、狙ってたのが、絶対に怒られると。あの連中が行って、

まともにできるはずが無いと。先生方にはですね、注意をするなど。だから、地域にですね。大人は覚悟しなさいと。つまり、施設に行けとなったら、施設が教育現場になっちゃうわけで、どんどん子どもたちが怒られて、どんどん私たち謝ります。それで、3年位したら今度は電話がかかるようになってきまして。電話といっても、いい電話じゃないですよ。逆ですね。物凄くタバコ吸いよるけど何とかならんかとかですね。でも、以前はというだったかと言うと、電話もしてもらえない。無視されとったわけです。「ありがとうございます」と。だんだんだんだん文句が増えた中に、少しずつ褒める言葉が。

それで、その選択ボランティアでやったいろんなノウハウをそのまま他の授業に生かす。たとえば、木工では、ついでに施設まで行こうとか。椅子を作ってもっていくとか。体育会なら生涯スポーツにするとか。要するに、今やっていることを利用して、地域に行きなさいと。

その頃、うちの学校は先生たちの平均年齢が29歳だったんですね。私が40代で、40代が3人、30代が3人、後は全部20代。若い先生たちは色々考えるんですね。要するに、ボランティアだけじゃなくて、挨拶と、ボランティアと部活。これ3つを、バラバラではいけない。ただごみ拾いをするだけじゃなくて、ごみ拾いながら会った人には全部挨拶する。全員。だから150名の方が、田んぼで仕事をしている人に会うと、150回挨拶して、帰りにもう一回150回挨拶をして帰る。素晴らしい効果があります。開校登山では440人行きます。440回。農作業をしてるおばちゃんに声かけます。帰りもです。そうすると、我慢しきれなくなったそのおばさんが走ってきて、教頭先生に挨拶して、「実は私は厳木高校出身です」と言うんです。今までそれを言えなかったんですね。恥ずかしくて。今まで、あんまり評判悪くてですね。やっとな、地域の人が厳木高校出身と言えるような学校になったということです。今は退学者は、2、3名です。邪魔になるくらいいます。「はよ辞めんか」と言うくらい。今の問題は不登校です。昔は入学式のときに辞めるのが3～6人いました。「俺はこの学校来る気無かった」言うて、次の日来ないですね。職員も顔見たことがないというのが沢山いましたけど。

ボランティアを生徒とやっていると、色んなことが

分かります。どちらかと言うと、学校の先生方は、させようとする。自分はせんです。だから、草むしりをしていて、先生の方を見ていたら、先生しかしてない。先生だけがしてるんです。生徒は、と言ったら、お年寄りのところ行って遊びよる。まあ、いいかというのが、うちの方針はですね。数をこなす。無理してやらない。やらせるのは、無理をします。企画は精密に。でも、やり始めたら自由です。時には、道順が、若い先生方だから、ちょっとこっちに行きたいなって違う道を通って、ちょっと帰りが遅くなったりとかします。もう担当の先生方に任せます。生徒にも任せます。企画は慎重に、活動は自由に、臨機応変に。怒られることは恐れない。だから、ボランティアを、上手くやれてよかったね、と言うふうにはしたくないですね。やって失敗したら、勿論起こられて帰ってきますから、そのつもりで地域に出していくということです。

志願率のことですが、0.7倍だったのが、10年前。今は1.4倍。一番下の学校なのに、上から5番目くらいの競争率があります。ほとんどが辞めなくなったのは、学力が上がって賢くなったからではありません。1年生を車で施設まで送ったときのことです。施設の方に行こうとして、10秒、20秒、30秒しても挨拶が生まれません。車を出発させずにじっとしていると、「先生何しよると?」、「なんか足らんね」と。やっと気づいて「お願いします」と。挨拶をせんやつを連れて行くわけにはいかん。「ありがとう」、「お願いします」を絶対言わせるようにしています。これは、常識だと。挨拶だけはするように言います。挨拶がやっぱり大切です。住民にとっては、とっても新鮮に写ってる。そういう風になってきたかなと。今日も卒業式で、うちの卒業式は昔のような卒業式です。音は一切しません。校歌だけは、爆発するくらい歌います。音を出してるのは大人だけです。保護者が一番前でガムをかみながら足を投げ出してまして、こいつはもう、オイ、と思いましたが、生徒は全然動いてない。シャーンとしてまして。生徒会長が、最後の答辞の中に、「最初はしたくなかったけど、行きよううちに喜んでくれる」、「喜んでくれると嬉しい。」と言っていました。プリントにですね、11ページに3年生だけですが、「あなたにとってボランティアとは一言で言うと?」という所に、「して当たり前」と書かれている。二番目に、「人の幸

せ」、「喜ぶこと」と書かれています。これは生徒会長だと思えますね。生徒会長は「自分がボランティアに行って、人が喜んでるの見て、自分が嬉しい」、「そういう自分を見た」というようなことを言って、答辞を終えてましたけど。まあ、元々いい子だったんですけど。一番下に、「つまらん」というのがあります。活動後に必ずアンケートがありますが、たとえば、「ボランティア活動を積極的に行っていると思いますか」という問いに対して、2年3年と、厳木高校はボランティアを積極的にやってると思う子が増えます。増えて、逆に、やってないと思う子が減ってます。しかし、中身は、ホントは違うんです。自分がしたい子は自分はいくらにも活動できなくて、厳木高校はまだやってないと思っている。逆ですね。ボランティア活動するときは、実は、この生徒が、がんばるんです。老人ホームに行って、お話ができる子もおりますけど、横で固まっておるのもおります。実は固まってる子が一番、「私は行きたいのに、どうして私はお年寄りとお話が出来ないんだろう」と思っているんです。固まる子が実は一番マジメなんです。一生懸命自分で努力して。保育園に行っても固まる子がいました。その子は「私は子どもが嫌いだ」と言います。でも、2年間選択ボランティアを受講しましたので、保育園に6回も行って、最後は子どもと遊べるようになりました。ボランティアをするときに大事なのは、一番やってない子を見てやる、ということですね。社会の体験学習と学校での体験学習が違うところは、社会の体験学習は、やろうと思ってる子が来ますけど、学校は、半分はやりたくないんです。やりたくないのをさせる。したくないのをさせなければならないというのが学校なんですね。だから、学校のやり方とすれば、やっぱりその生徒を暖かく心の中まで見てやらないといけないのかなと思っています。以上です。

南里

ありがとうございました。具体的な例を交えていただきながら、お話していただきました。一つだけ質問したいのですが、地域のサポートというのは、ありますか。厳木町は、地域の年代別婦人会、最近は壮年会というものもあるそうですが、そういうところとの組み合わせはないんですか?

進藤

残念ながら。厳木町長がうちの後援会長を務めてるんです。で、ありながら、これだけ厳木町とどうして離れたかな、と思うんですが。最初に、厳木町に挨拶に行き、厳木町の役場を無理やり掃除してですね。捕まったときの用心にですね。警察署に毎回行って掃除して。やばい所はみんな掃除行くんですね。生徒は悪いことができなくなります。顔を知られてしまいますしね。厳木町は昔、炭坑町で、駅には、蒸気機関車の給水塔の古いのがありまして、竹中直人が出た映画の舞台が厳木駅なんですね。もうないんですが。そういう大事な駅なんです。駅には、今、ギャラリーができてます。駅舎を改造して。そこに絵を飾ったりするのも、うちがするし、風のふるさと文庫を作って、本が積んであります。その本は自由に貸し出し。要するに、図書館で余った本を置いてるだけですが、でも、その3倍くらいは寄付がありました。JRと連携して、警察と連携して、他に施設と連携して。今日も実は恒例になってますが、卒業証書をもらう前に、厳木に特老が在りますが、その特老の人が来て花束贈呈式をしました。卒業式は、お年寄りが来て、花束贈呈してくれるんだ、というふうにはなってます。今やってる施設との連携は、体育祭では保育園の子どもと一緒に遊ぶ機会をつくり、講演会やら観劇は必ず呼びます。子どもが来たり、お年寄りが来たりですね。そういうものを見て、自分達の学校はこんなのかなとだんだん気づいてきます。要するに、自分達にプライドを持たせるような仕方をしていけないとうちの生徒たちはプライドが無い。0に近い。輪切りということは、中学校の先生から、お前らもうしなくていいと言われて、リーダーになりたかったけど、なれなかった連中ばかりなんですね。その中に、ホントはやりたいんだという連中が沢山いますね。実はアーチェリーが今年度国体で優勝しまして。アーチェリー部からは、オリンピックに二人行きます。一人もう行ってますね。そういうレベルの高い部活がありますから、そのレベルと、そういう目標にですね、やっぱりちょっといい子が来ます。

南里

どうもありがとうございます。それぞれ4人の方に色々想いを語っていただきました。あまり討議の時

間は無いんですが、質問という形でお願いします。このテーマは、スキルの問題よりも、根本的な本質的なことで、それぞれ4人の方にご意見・ご質問がある方はここで受けたいと思います。いかがでしょうか。ご意見・ご質問ある方、手を挙げていただいてよろしいでしょうか。三人ですか。三人の方、よろしく申し上げます。

では、小原先生の方から。

小原

長崎大の小原と申します。実は、ボランティア論というのをちょっとやっております。進藤先生と上野先生にお伺いしたいんですけども、先生の方で今日、配布していただいた資料の、12、13、14ページのところに、学校ボランティア、ボランティア全般が非常に、成果が拳がってるといえば拳がってるんですけども、この成果が、厳木高校だから挙げられた成果なのか。こういうやり方で、一般の小中学校へも、一般化できるのかどうか。先生なりの、体験は無いと思いますけれども、お考えを。上野先生には、こういうような形の生活体験活動、あるいはボランティア活動が、生活体験学習の中で、どのような位置づけになるのかということをお尋ねしたい。

南里

では、進藤先生の方から。

進藤

すいません。私の書いた12、13、14ページ、以前、社会福祉協議会の会議で発表してですね、すごく批判を受けて怒られたのをわざと出しております。というのも、全部逆説論で書いてます。このときは、ボランティアの考え方に詰ってしまっていたんです。ボランティアは自主的である、ホントか？と逆説で考えてみたんです。そうでない場合もあるし、学校でやる場合と、そうでない場合はやっぱり違うと思います。僕は、赤十字活動のボランティアも、JRCというんですが、それにも加担してまして、そこで教えられた、気づき・考え・行動するということを、ボランティアの基本だと教えます。提案します。その気づき・考え・行動するときに、子どもは成長し、大人になっていくと。大人にしてやるのが高校ですから、じゃあ、子どもを大人にするっちゃ、どういうことやるかと。自分が必要とされている、自分がちゃんと何かできると感じられ

るようになれば、大人かなと。なんかそんな感じがします。

資料の最後のところに、ボランティア担当者へというのがありますが、担当者3人くらいいて、これを一部渡して、私が転勤した後しっかりやってくれと。これは他の学校は状況が色々あると思うんですが、まず、「うちは、潰されそう」と思うこと。これはもう切実な問題ですね。実際に潰されている学校を見ると、ものすごく優秀な先生がいるのに、何もやってない学校ですね。地域に出たりも何にもしてなくて。要するに安住している学校はできませんね。今朝、昨日も生徒と先生がけんかしていましたけれども、生徒が言いがかりをつけるんです。1年生は中学生のまま、そのまま2学期くらいまでその状態ですので、先生を敵と思ってますね。だから、厳木に来たら、先生は味方だよって。敵とは今は思っていない。でも困ってるのがですね、生徒が先生を友だちと思っていることですね。あまりにもなつきすぎてですね。これでいいのかなって、今思っているところですけど。まあ、そういった、自分達に危機意識が無い学校というのは無理ですね。相当パワーがいらいます。なりふり構わずやらせる校長がいました。逆らうと飛ばされましたね。ほんと、飛ばされました。そして、そのやり方は、まずやって考える。反対はなしなんです。「する」は「する」なんです。した後、先生実はこうしてこうでしたよと。全てこういう方針ですので、実は職員会議の時間は、ほんの10分くらいなんです。「すれば、する」ですよ。その後どうするかが問題なんです。覚悟がいらいます。地域に出すということは、地域に迷惑かけるといことなんです。謝る覚悟がいらいますね。自分に関わらない人は駄目ですね。その覚悟があれば、何でもできるんじゃないか。まだ、生徒が本当によくなったわけではなくて、その流れをやっと10年で作ったかなと思います。本当はボランティアってもっと深くやりたいんですね。色々国際的なやつとかですね。そこまではまだできません。ひたすらごみを拾ってる状態ですね。

南里

はい、ありがとうございました。では、上野さんどうぞ。

上野

進藤先生は元々理科の先生でいらっしゃるんですね。今はもう福祉の担当でいらっしゃいますけれども。進藤先生と、10年位前に議論したことがありましてね。厳木高校は、最初からここまで展開されていたわけではなくて、高校の先生の中には、校内で喫煙をした生徒にはペナルティで清掃に行かせる、と考えておられた先生もいらっしゃったようです。その話は、実は本末転倒になりかねないんです。生徒がタバコを吸って、教師がそれを叱ります。生徒が「私、ボランティアに行きたかったからタバコを吸ったんです」みたいな逆の話が出ませんか、というようなことを聞いたわけですよ。ところが、このペナルティとして行かせた段階でも、生徒の様子が変わってきたという話を進藤先生に伺ったんです。学校の中では鼻つまみ者のようにして、いつも清掃に行かされる。ところが、地域の住民の方々にしてみますと、学校でどんな悪いことをしたかっていうのは、あんまり分からないわけですよ。そうすると感謝される。「ああ、また今日も来てね、掃除をしてくれて…」と。あるときには缶コーヒーを貰ったりする。そうすると、地べたに座って嫌々清掃をしていた子どもたちが、背筋が伸びて、学校に帰るときには、シャンとして帰って来るというような話を伺ったんですね。私の話の中にどう位置付くかというご質問なんですけれども、これは体験学習なんだと思います。何を体験していくのかというと、そこでは、人間関係の再生であるとか、人間関係を創造していくということについて学んでくるのではないかと思います。

南里

はい、どうもありがとうございます。

では、次に森山さんどうぞ。

森山

県立大学の森山です。あんまり時間が無いので、三人の先生方にそれぞれ短く。一つは上野先生。最初は、レジュメに出てます、生活体験不足ということ言ってる。この生活体験というのは、直接的な生活体験というように、直接という言葉がつくんじゃないか。あるいは午前中に、リアルな体験とバーチャルな体験ということ言っておられましたが、やはり、私どもの学会の生活体験というのは、直接的な体験なのではないか。生活というのは、生産・労働・消費、こういっ

たことがあるわけですから、それが、リアルさがなくなってきたのではないかというのが一点。

二点目はですね、色々まとめていただいたから、そういったことを今後深めていく意味で質問させていただいているんですけども、一点目は、欠損体験とライフスキルといったことを先生おっしゃったかと思うんですが、私が読んだある哲学者は、労働過程ということで、労働というのを非常に具体的に言っているんです。素晴らしい芸術的な家を作るクモやミツバチと、たとえば、壊れる家を作る大工がいる。そこで、その壊れる家を作る大工の方が優れている人間の特質は何かと。それは、下手な人間の大工というのは壊れる家を作るわけです。けれども、作るときにもう、その壊れる家を構想している。ミツバチやクモというのは、本能でやってるだけなんです。ここらあたりを労働過程といった意味を含めて、もっとライフスキルとか…中身で言っていただけならばありがたいなと。ライフスキルというのは、これも私は勉強してきましたが、精神医学者のなだいなださんは、フランスに長くいて、やはりライフスキルというヨーロッパで考えられてきた概念というのは、非常に深いものがある。具体的に言えば、日本の学校と違って、考える人間をつくるんだと。常に考えさせる。イギリスなんかでも、ライフスキルの概念というのは、先生自身もライフスキルというのも色々あると言われましたけれども。このあたりをちょっと。それが私の意見です。

それから、正平先生に対しては、ウイーン的女性が「昔の生活を教える場所じゃないか」と言ったとか。このあたりも、決して昔の生活技術を教えるだけじゃないと、正平先生も思ってる。ちゃんと洗えと言うと、ちゃんと洗うけど、箸はちゃんと洗わんと言う。言われたことはするけど、いわゆる「でもしか先生」ですね。そういうやっぱり人間というのができてくるというのは、まさにさっき言ったように、ミツバチとクモのように、言われたことしかできない人間が増えてるんじゃないかと思うんです。その中で、正平先生が3つの著しい欠損体験とおっしゃったんですが、私は、第4番目にですね、これは上野さんなんかもおっしゃるかと思いますが、自然とつながる喜びというのを欠損体験に入れたい。そのあたりはどうなのか、これをお聞きしたい。

それから、進藤先生に対して、私も担当していましたが、実は、福岡でも、青松高校とか福岡工業なんかはこういった実践してるんですね。それはあるんですが、先生のレジュメの中に、8ページの一番下に積極性が非常に出たとか、こういう項目出してますし、私は、一番やっても出ないのが、実は積極性じゃないかなと思ってまして、素晴らしい成果だなと思いました。自信がついたとか、自分が役立つ人間だとか、プライドゼロからそういう風になってきた、そういったところから教科学習に意欲を燃やすなり、成績も伸びたというような例はないだろうか、どうですか。というのが質問です。

南里

時間がありません。

では、桑原さん。

桑原

失礼します。私は、正平先生の言葉をお借りするなら、お試しセット、試供品というようなことを案外やっているような学校現場から来ているんですけども、「体験させられてないことはできない」、「教えられてないことができない」というのは、頭では分かるし、私も正平先生の言葉をお借りして学校現場では話しております。しかし、説得性が無いというのが、今、上野先生方のお話をお聞きしながら思ってたんですけども、議論だけでも分からないし、体験だけでも説得性がない。やっぱり存在価値があるのが生活体験学習学会だと思うんですけども。私たち学校現場にいるものとしては、体験をもとにして、先生のお言葉をお借りすれば、やはり、学力に高めてやらないと、私ども学校の意義がありません。そこをですね、今日、進藤先生のお言葉を聞きながら、なるほど、そうだと思います。注意するなということだと思います。「注意するな」というのは、緻密な計画のもとで、やはり教員も怒られる。そして大人も怒られる。やっぱり対応がまずかったりしたら。そういうようなことを体感・体験していかないと、そしてその言葉を使わないと、やはり説得性というのは生まれてこないと思うんですね。それをですね、先ほど、正平先生が共に行う学習プログラムという風におっしゃいましたが、それは可能なんでしょうか。親は、家庭、地域社会は。それをどう巻き込んだところでの学習プ

プログラムとは。そういったことについて質問いたしません。以上です。

南里

時間が迫ってきておりますが、今の質問について、上野さんから。

上野

まず、森山先生のご質問なんですけれども、ライフスキル論については同感です。そのことは私は色んな議論があるということは知っていましたが、きちんとレビューする時間が無かったものですから。色々ある議論の中でライフスキルを安易なサバイバル技術というふう置き換えるのは危険だということを申し上げたかったわけです。それから、生活体験のリアルなもの、それから、直接的な体験ということなんですけど、ここは生活体験と言ったときに、生活というものをどう概念化するかという問題と関わってくるかと思えます。ただ今回は、そこまで構想することができなかったというわけです。それから、労働過程の話をされましたけれども、今日の午前中の報告の最後のところで、この労働過程という言葉を意識しながら、生活過程という言葉を使っております。つまり、労働過程において、たとえば、壊れる大工とミツバチの違いというのを指摘されたのと同じように、生活の創造の主体というものをつくっていく。つまり、動物の生活と、やっぱり人間の生活が違う。なぜ、生活体験ということを学ぶのかというと、そこでは、子どもが生活の主人公となって、生活を創出していくということが私たちの課題ではないかということを考えて、生活過程という言葉を使って報告をまとめてみたわけです。

桑原先生のご質問は、親と共にするプログラムということなんですけれども、私は正平先生のお話を聞きながら思っていたのは、草木染の話がありましたよね。草木染の中に込められた意味はなんだろうかというように考えてみたときに、親が草木染の工夫ですとか、そういう他者とは違うものを、自分の中につくり出していく営みというのが一方であって、技として親の中に蓄積されていく。それを子どもと一緒にすることというのは、自分が編み出した技というのを子どもに伝承していく。他の家庭には、無いものをその家庭の文化としてつくり上げていく営みなんだろう。そこに、親子が共にすることの意義があるのではないかと考えてお

ります。

正平

私は今の子どもたちが自然との接触体験を豊かに持っているのに欠落している体験の中に挙げなかったという訳ではありません。私は、働く・生産するという体験、つまり、生活体験学校でやっている取り組みというのは、働く・生産するというのが、やっぱり、野菜一つにしても、それから鶏の卵を採るをことにしろ、何にしろう、もう動物や植物、自然をよく見つめること。そういうことを抜きにしては無いわけですから。まあ、かえって先生がそんなふう自然体験とおっしゃると、バードウォッチングとかですね、昇る朝日を観察してとか、これがイメージとしてあるとすると、それは、そういう体験は、無いよりあったほうがいいけど、とりあえず、生活するには、バードウォッチングよりも、私の体験から言うと罌でもかけて捕まえて、焼き鳥にでもした方がいいかなあというわけで。ここで自然体験というと、生産・労働、その母体としての自然を体験するというのが入っていると思います。

それから、親子で共にする体験というのが、意味なり可能性なりということが、まあ、言わなきゃいけないでしょうが。今週、宮城県の仙台に呼ばれて、あそこは通学合宿が非常に熱心なものですから、ここ4年間くらい間に、すごい普及状況なんです。一緒にシンポジウムに出た宮城教育大学の古賀先生という方が、「子は鋸カスガイ」という言葉を利用してですね。まあ、今、結構離婚が増えて、なかなか、お父さんとお母さんの鋸にはなりにくい状況になってきたんだけど、もう一つ、子どもは、地域の鋸になれるんじゃないかと。子どもがいるから地域の大人が繋がっている、そういう見方で。子どもがいるから地域の大人が手をつなぎ合って何かをやっていく。そういう観点から言えば、まさに生活体験学校も、やっぱり子どもが一週間合宿しているから、大人が色々な関わりをしてきている。可能性と具体的な現実がある。とりわけ、定年を過ぎて、家庭に鎮座して、テレビの守りと掃除の邪魔しかしない男たちを、どうやって引き出して戦力にするかという議論と、それから有り余る時間を持て余している祖父母の世代の力をどうやって借りるかが、具体的な方法論としてのこれからの大きな課題だと思います。

南里

進藤さんお願いします。

進藤

私どもは、ボランティアをして成績が上がったとは、全く考えてもいません。私は全然別だと思っておりますので。たとえば、授業よりも施設訪問が大事です。なぜなら施設訪問は今日だけです。勉強は明日もできる。介護体験学習がある。「訪問したい人はいませんか」と広報を出す。そしたら、バババツと来る。「先生、この日試験があるばってん…」、「試験は明日もある体験は明日はできん」というふうに。しかし、あえて成績という、学校で出す成績というのは上がりました。やっぱり、ボランティアばかりやっているわけじゃなくて、挨拶とかボランティアで落ち着かせることが大事ですね。その他に、10分間読書というのがあります。これは別に読書をするためじゃなくて、朝から騒ぐなという意図です。ただそれだけのことで、10分間静かになると、どうなるかという、今まで大人しい子どもたちは、朝、本を持ってきて読みたかったわけですよ。だけど、読んでたらからかわれる。「何読みようや」と。それが堂々と読める。堂々と図書室に行けるので、図書室は、今は本を読むところですので、3～4倍は読書量が増えますね。ただそれだけのことで、朝は静かです。というふうにボランティアも、生徒を落ち着かせます。学校全体が、要するに勉強しやすい環境に変わると。そういうことです。

森山

成績と聞いたのが悪いと思うんですけどね。斉藤喜博という学者が、夏休みに、プールで泳げなかった子が、25m泳げた瞬間に、「よく頑張ったね。頑張ったら学校でもこんな調子で勉強すればできるんよ」と言われたら、成績上がった話を聞いたもんですから。セルフエスティームという言葉がありますが、そういう形で、人間というのは知的なものだから、やっぱり知性を磨かないといけないわけで、ボランティアをすることによって自信が出て、知性が磨かれてきたんだらうなと思って言いました。以上です。

進藤

ボランティアで大事なものは、仲良くなるのか、そんなこと以外にも、「気付く」ということですね。だから、必ず私の授業のときに聞くことは、「何に気付いた

か」、「仲良くできたか」、「何に気付くのか」です。何でもいいんです。「こんな施設があって、こんな仕組みになってて車椅子が入りやすいのに気付きました」とかですね。そんなふうな、必ず気付く行動というのがボランティアにはありますから。そういうマジメな子が、ボランティアをすることで、行動が慎重になるとか、色々気付くようになったというのが、そこで分かります。

南里

ありがとうございます。

最後に辻さんの方から、厳木町のボランティアのことでご意見をどうぞ。厳木高校の場合は義務制ではないけれど、一年間に20回位すると先程言われたが、それはボランティア施策とは方法論的な方向性が違うと捉えたらいいのか。基本的に、今の施策との対比において、どう考えるのか。厳木高校は、今まで偏差値も低かったが、やる気がなかった子どもたちが非常に生き生きしました。ただ、先生が大変だったというお話がありましたが、そのことなどに対してお願いします。

辻

はい。私も一番最後に2行に渡って書いているんですけど、「実際には体験できないことでも理解できるようになることが、人間の発達であり、教育の役割なのではないか」と書いたんです。これは、東京の市ヶ谷商業高校というところの先生がおっしゃったことなんです。その高校では最初、パソコンの修理やなんかをやって、商業高校ですから、そういう知識があって、そしてそれを、パソコンがほしいという人に譲るってというような活動をやり、今は、パソコン教室を高校生がやっているんですね。新聞でも大きく取り上げられたんですが、その活動をNPO化して、さすがに高校の中にNPOの事務所は置けないということで、ある先生のご自宅を事務所に名義上ではしてるんですけども、活動は市ヶ谷商業高校の中でしている。その中で、生徒たちが生き生きと活動をするようになって来ているという、今日の進藤先生のお話と同じようなことを聞いた後で、その先生が、「でもやっぱり悔しいんです」とおっしゃるんです。要するに、実際に体験してできるということは、人間の発達として、ごくごく初期のことなのではないのか。高等学校で教えたいこととい

うのは、たとえば、天体観測とか、あるいは、文学作品を味わうとか、歴史の勉強をするとかの、それらは実際に目の前ではできないことを、何かの手がかりに基づいてやっていく、それが人間の発達であったのに、そこまで行けないのが非常に残念です、というお話としておられるんです。

だけれども、多分、その市ヶ谷商業高校の先生も、かなり自信を持っておられて、ほんとにやっぱり、中退率がずっと減ってきたということから、かなり学力の方もついていくんじゃないかな。多分、森山先生の推測は当たっていると思います。進藤先生のところも、しっかりしてきているんじゃないかなと思っています。

それから、せっかく前に座っているので、もう一つ言い忘れたこお話しをさせていただきたいのですが、今、若い人たちがなかなか就職できないという中で、どう自分を売り出していくかという、アピールしていくかというときに、かなり生活体験だとか、そういうことを売りにする傾向が出てきているんじゃないかということです。たとえば、大学生が就職するときに、アルバイト体験って、すごく重要なポイントになってきているんです。たとえば家庭教師なんかやっていて、先生、先生と呼ばれている人って、就職ではかなり不利になるという状況が、今、相当広がってきているわけです。頭でっかちじゃなくて、体験があって、しっかり身体が動かせるという人が、結構喜ばれるという現象が出てきていると思います。その意味で、生活体験が競争原理に巻き込まれる危険性があるのではないかと、そういう問題にどう対処して理論化していくか、実践していくかというの、大きな課題じゃないかと思っています。

南里

どうもありがとうございました。今日は「奉仕体験・生活体験の原理を問う」ということで始めましたが、やっぱり、難しい問題で、問うだけで終わったような気がします。しかし、学会の研究にとっては、これも入り口ですからご了承ください。

最後に辻さんが、競争原理のパラダイムという中にボランティアの活動に対して、活動の是非を求める動きがあるが、それと同じようなことで、生活体験が乏しいという条件を一般的に普遍化して、それに対して、これはよい、これはどうだ、と議論をしていくことで

は課題の本質を抜きにしていく危険性があるのではないかといいことを言われましたが、大変大事なことと思います。しかし、子どもたちのことでは、正平先生が言われている、子どもたちの実態、子どもたちを取り巻く親、大人というのをどういう形でつないでいけばいいのかという問題を、今日特に、それぞれのライフステージのところで取り上げ、生活体験が大事だと言われると、最初に書いておりましたように、国民教育の課題という形で受け取られてしまうのですけれども。ボランティアの施策の意図や週5日制、総合的学習での体験学習の進め方が、実は違うのではないかとということに少し気付き始めたように感じます。

今回のテーマを各々の課題を出して、それぞれ立ち上げ、今後どのように検討していくのか、ということについては、それぞれの想いがありでしょうし、分野がそれぞれ違いますので、今日まとめるのは無理な気がします。しかし、そういった意味では、非常に課題認識が広がってきた。どこがどういう課題で、どういう問題があるのかということが少し分かってきたといった点では前進ということで、学会としての本質的な理論化の作業に少し踏み込めたかなと思っています。登壇者を前にして、こういった評価をするのは、コーディネーターとして大変よろしくないんですが、みなさんも、この難しい課題に対して究明していけるのではないかと思います。

この学会としても、先程会長が、末崎会員が分科会の司会のまとめで「小さな学会なんだけれど、大きな課題を持って生きているということにおいては重要だ」ということ言ったというのを聞いて、大事なことを言う教え子だったなあと感動しております。まさにそうだと思います。小さな学会なんだけれど、すごく大きな課題を提示している。そのことに、会員全体がどう立ち向かっていくか。自己主張するんじゃなくて、共同して考えていかなければいけないのではないかと思います。

時間が来てしましまして、これで終わりたいと思います。辻さんは、羽田空港の管制塔トラブルで、長時間を羽田で過ごして、今度またとんぼ返りをしなくてはいけないということですが、非常に貴重なお話を聞かせてもらいました。それから、進藤先生は、非常にユニークで面白い、一言で言えば、子どもが可愛くて

しょうがない、そういう関わりをしてこられて、子どもたちがなついて困ると言われていました。なついて困ると言う先生は非常に少なくなりました。上野先生、正平先生は、いつも学会の中でお話しをさせていただ

ていますが、今日は二人のゲストと共に、ボランティアと生活体験の関連を問う今日的課題を本質的に問うすばらしいシンポジウムになりました。本当にありがとうございました。